

(31) コンセプトの純化と展開からみた
市民参加型のことおこしに関する研究
—大阪上町台地／太陽・緑・水—

EVENT PLANNING AND MANAGEMENT FOR CONSOLIDATION OF MENTAL MEANING WITH SHARP
CONCEPT MAKING FOLLOWED BY SEMANTIC DIVERSION BY PARTICIPANTS IN CASE STUDY OF
UEMACHI-HILL PROJECT FOCUSED ON SYMBOLIZED SACRED SUN, BEQUATHED GREENERY AND
DRIED-UP SPRING

○ 近藤 隆二郎・盛岡 通
by Ryujiro Kondo, Iohru Morioka

ABSTRACT: Semantic environment design are to be based on common images on regional environment perceived by citizens.

Event management is requested to present relevant image of the city to participants. Public perception is guided by means of concept making in event management, that should be based on the following two points, 1) sharply focussing on the unity of the theme of the event, 2) diversion of introduced image of event by participants towards intimate their relationship to environment through direct experiences in the event.

We have planned three walking events on the Uemachi-hill. The 1st event with the concept of Sacred Sun implied the beautiful sunset cosmos to indicate eternal relationship between human and the sun. Bequathed greenery in shrines and temples in the 2nd event, and Dried-up springs in the 3rd event which have ever provided drinking water for people are regarded as major environmental resources through the action participants are expected to play as urban green-planter or water-deliveryman in the symbolic role-play game.

These three events clarify that sharp conversion and diversion of introduced images in the events contribute to participants actions towards consistent formulation of semantic images of the region.

KEYWORDS: Event management, Concept design, Environmental image perception

1. 研究の背景・問題提起

市民主体の身近な環境づくり¹⁾やまちづくりが提案されてから久しい。市民が能動的に参加する形態を導くための初期の動機づけとして、あるいは、リーダー役の市民の抱く思いをより多くの市民が共有化する機会として、人々が地域やまちに対して抱いた環境観を提示し、共有する仕掛けが必要である。

本研究では、人々の持つ地域への環境観をはぐくみ、共にする具体的手法として、「ことおこし」を提起し、具体的には「まち巡り」という一類型の構成の手順を示し、実施結果からその有効性について論じることを目的とする。特に「ことおこし」においては、コンセプトを純化した設定について考察する。「まち巡り」の事例としては、大阪の上町台地で行った3回のイベントを素材として取り上げる。

2. 「ことおこし」について

2.1 祭り・イベント・ことおこし

「ことおこし」は、イベントを思い起こさせ、共通点がある。しかし、イベントという言葉は、展示会から博览会までありとあらゆるものに使われてきたために、EVENT=「こと」の原義が薄れ、「イベントブームは去った」と言われるように俗化、希釈化されてきた。元来、イベントの語意は「出来事、事件、結果、種目、事象」²⁾であり、近年の計画的な「こと」としては「祭礼」「祭り」などといった民俗事象にその原型を見ることができる。「祭礼」は、共同体の意識が表出する機会であり、非日常空間の中で、人々に対して「意味」を強烈に与えるものであった。人びとは、祭りに参加することで、退屈な日常=ケを非日常=ハレ

* 大阪大学工学部環境工学科 Dept. of Environmental Eng. Osaka Univ., Suita, Osaka 565, Japan

として転化し、乱痴気騒ぎを経ることで、日常の規律を逆定義するという機能を持っていた。しかし、ハレの日常化の中で、近年のイベントは「お祭り気分」で商業的に演出されているものが多い。むしろ、情報が氾濫している現代において、濃厚な人と人とのコミュニケーションを演出することによって、新たな交流の機会(情報の発信)となる点が重要である。本研究では、「イベント」や「祭り」を、新たな人々の＜交流＞を生み出すものとしてとらえ、「わたし」や「まち」のアイデンティティを確認することを期待したイベントを「ことおこし」として用いる。特にイベントに参加する主体の側に立つと、「ことおこし」とは、内的世界の自己組織化を促す機会を持ち、参加主体が共有している対象である「こと」を介して、環境に働きかけてゆくことを可能にさせる(enable)仕掛けである、とすることができる。

2.2 現在のまちにおける「ことおこし」の意義

「アイデンティティの確認」は、森田三郎によれば「祭り」の第一義的機能であり、参加者から見れば、次のように二つの方向があるとしている。

表1 祭りにおけるふたつのアイデンティティ確認機能³⁾

①	社会あるいはコミュニティにおける自己の位置づけ。	空間的・横断的位置づけ
②	自己の存在を祖先から子孫への時間の中に位置づけることによって、現在に生きる自己の価値を確認する。	時間的・縦断的位置づけ

この二つの機能は「こと」の持つ可能性であり、現代の状況に合わせて次のように捉え直すことができる。

(1) ひととの関係回復としての結晶型ことおこし(図1参照)

隣人の顔も知らない、という現在、「ことおこし」という集まりの中で知り合うことによって、新しいコミュニティをつくるのが可能である。高度情報化社会である現在においては、顔を実際に突き合わせる「こと」は、ハイタッチ(感性志向型)コミュニケーションとして重要視される面を持ち、「こと」を共有化することによって、新たな人間関係(ネットワーキング)を構築する可能性を持つ。「市民まつり」や「川の清掃」といった「ことおこし」の中で、人々は、隣人とつながり、自分を包む人間関係の糸を再認識し、まちのなかで相互の位置づけを行うことができる。



図1 結晶型ことおこしの概念

(2) まちに流れる時間との関係回復としての「ことおこし」(図2参照)

地縁の衰退と共に、「まち」空間との関係も失われつつある(場所の喪失)なかで、「まち」という統合体を「こと」によってひとつの面を切りとって顕在化させることは、まちに対してのつながりを再生することにつながる。

「時代まつり」「〇〇記念パレード」などは、歴史の断面を見せることによって、現代までの共同体の記憶を象徴し、人々にまちを再認識させることである。橋本がイベントを「記憶を創るシステム」として、「歴史のない場所に歴史をつくり、歴史のある場所にはその意味を多義にする」⁴⁾効果を持つと言うように、市民の持つ地域像に刺激を与える、あるいは「まち」との関係回復するのに、ことおこしは有効である。まちとの関係を回復する一意味づけする一記憶を創る仕掛けとして「ことおこし」をとらえてみる。

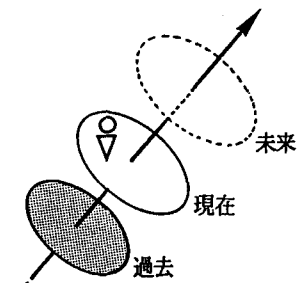


図2 まちとの関係回復としてのことおこしの概念

もちろん、この二つの視点が絡み合っていることが多い。しかも、ひととの関係回復には、人とむきあう対他自己を自らがながめるというアイデンティティ確認がある一方で、まちとの関係回復についても自らのパーソナルな時間の流れから前世代および次世代のそれに感情移入を試みる双方向の行為があろう。本論文では、前者の視点がコミュニティ論等で扱われてきたのに対して、あまり語られることのなかったまちへの関係回復を図るものとして「ことおこし」を捉える視点を中心に展開する。

3. コンセプトの純化と展開について

3.1 コンセプトとは

「ことおこし」を自発的な出来事という捉え方ではなく、参加者がまちにおけるアイデンティティを確認することを可能にさせる手法であるという操作的視点に立つと、そこには演出する仕掛けの手法としてのコンセプトが必要となる。筒井喜考によれば、コンセプト（筋書き）とは「多次元に、しかも散財している事象を、ある視点で絞り込むことによって、統合的な見方ができるようになる。いわば、事象なり考え方なりをくくる、“ひも”のようなもの」⁵⁾である。出来事的な仕掛けである「ことおこし」には、「ひと」あるいは「まち」のある面を切り取って提示することが必要であり、断面を語るコンセプトこそが「こと」を左右する鍵であるとも言える。大森彌、森戸哲らによって「ものがたり性」が重視されているもの、このコンセプトの重要性を説いている。言わばコンセプトとは、多義的な「まち」を解読する視点（コンテキスト）を与える「ものがたり」であり、参加者はその分脈に沿って地域を解読し、次には語り手となるのである。

3.2 コンセプトの純化と展開

意味論を説く瀬尾は、「祭り」を「集団の表現体でありながら、それが常に内部からの反乱にさらされているという緊張関係」⁶⁾をもつとして、次の二つを隠喩的な都市の備えるべき空間的な条件としている⁷⁾。

①そこに内在する基本的な性格の中に、人を日常の埋没状態から引き上げ、自分自身の真の欲求に目覚めさせる衝撃的な、あるいはドラマチックな意味的契機を認めることができること、

②この非日常性の体験主体が、今度は逆に、都市の意味論的な構造に働きかけて主体的につくり直していく逆作用が可能な仕組みになっていること。

この二点を、それぞれ「ことおこし」のコンセプトの条件として整理すると次のように「純化」と「展開」という点に分けることができる（図3）。

1) 純化（テーマの統一性）

「純化」とは、テーマの設定として取り上げられることが多く、「ことおこし」の中で描かれる地域の過去・現在・未来を選択的に叩き出して見せようとする断面の提示である。あるテーマを設定したら、そのテーマに基づいて「まち」の分脈を再構成しなければならない（意味像の設定）。「ことおこし」は「こと」であるために、伝えるべき情報量には限界があることを認識し、まちのある面に絞った断面を鋭く伝える設定が有効である。この認識がないために、あれもこれもといったテーマ設定で結局「まち」というものがぼやけてしまうイベントが少なくない。

2) 展開（いかに伝えるか）

ひとつのテーマの世界（意味像）を一方向的に提示するだけでは、市民に「見る」という受動的態度を与えてしまうだけである。森戸哲が「人々が思い通りに自分を入れてその出来事を語りたくなること、あるいは他人もまた語ってくれることで意味の共有ができること」⁸⁾を「物語性」としてと述べているように、まちとのかかわり合いを主体の中で構築する展開として、参加者をその意味像の一場面人物として「ことおこし」に取り込む

ことが必要である。「ことおこし」の意味像の中に位置づけられる（登場する）ことから、語り部（story-teller）になれるのである（図4）。「歴史まつり」と称して行われるパレードにおいては、当然「見る人」

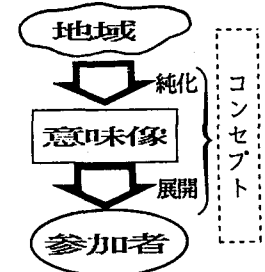


図3 コンセプトと純化・展開

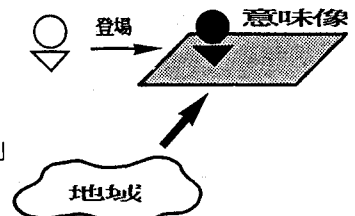


図4 「登場」の概念

よりも「演じる人」の方がより地域への関係づけを深めている。ルール
また、瀬尾の言うように、参加して意味を得ると共に、自分の想（他人）
いで地域像を変えていくことが可能となり、「演じる」という行
為によってまちの意味を共有することができる。

4. まち体験行動の考察

本論ではより具体的な見地を得るため、「ことおこし」の中
でも「まち」を具体的なイベント空間として、多数開催されている
「まち体験行動」を取り上げ、その中に前述の「ことおこし」の
視点を持ち込む方法を模索する。

4.1 まちづくりのプロセスにおける「まち体験行動」の有効性

「まち体験行動」とは、その中心となる参加動機によって図5
のように「みる」「きそう」「あるく」を重視する形態に分類することができる。「まち歩き」「まち遊び」
「まち発見」といったように、イベントの中で実際にまちを題材として行われるものであり、その中でも最
も一般的な「まち歩き」は、図6のような特徴を持っているとされている⁹⁾。

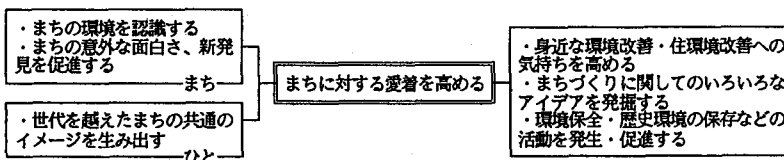


図6 「まち歩き」の特徴 (近藤:整理して図化)

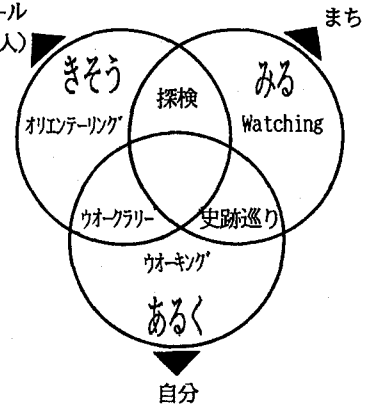


図5 「まち体験行動」の形態

「まち体験行動」は、「〇〇ウォッチング」や「〇〇探検団」というような名称で行われているが、その基本となっているのは、自分の視点で実際のまちを

見る、ということである。まちを散策することの少ない現在では、「まち歩き」自体に、地域への関係を回復する芽を見ることができるが、「イベント」という複数の人数によってまち歩きを行う形を体験することによって、さらにまちづくりへの意識を形成する手法としての意味を深く持つ。

つまり、参加者が体験を通して五感を働かせて地域を見直し、知識を刺激して新たな価値や素材を発見するとともに、他の参加者と共通するものを読み取り、共通の認識を育てるのである。しかし、参加者の五感を働かせる、あるいは他の参加者とのコミュニケーションは、単に歩いただけでは生まれないことも多く、演出としての仕掛けが必要となる。そのひとつは、倉原らによって提案された「遊び」と「子ども」の視点を基礎とした「まち遊び行動学」に見ることができる¹⁰⁾。

4.2 コンセプトの純化と展開に基づく「まち巡り」の提案

前述のまちへの関係回復の視点から、まち体験行動におけるひとつの手法の提案を試みる。

「まち体験行動」としてコンセプトの純化と展開を持つイベントの仕掛けを「まち巡り」と呼ぶ。「まち巡り」を経る参加者は、意味像というコンテキストの中でまちを体験することによって、まちに対して自らが抱く環境像の形成を促される。つまり、単に歩くことによって、まちを断片的に自己内で知る・発見するのではなく、あらかじめ仕掛け（コンセプト）の中にまちの解釈の仕方—このようなまちである—を提示することによって、その視点を持つ参加者に、日常では見えにくい環境資源を発見、評価させるのである。

「まち巡り」の視点は、「まち体験行動」においてまちのひとつの面を取り出し、その面に対する人とのかかわり合いを参加者に疑似体験させることによってまちへの認識を深め、同時に現状を見直すことを特徴とする。そして、図5のそれぞれの形態に「まち巡り」としての場面設定を意図することによって表2のように3つのまちめぐりのパターンを考えることができる。

表2 まちめぐりのパターン化

まち体験行動の分類	まちめぐりのパターン	具体例
「みる」を重視	舞台演出型	「歴史の散歩道」など
「きそう」を重視	演技演出型	「大風合戦」など、
「あるく」を重視	衣装演出型	「仮装行列」など、

まちめぐりのコンセプトの展開として、テーマに基づいた意味像に対してどのような点を演出として重視するかによる分類である。コンセプトを鋭く提示することによって、「まち」に対する係わりを

強く育むという「まち巡り」の視点を持つことによって、初期の動機づけあるいは地域像の確認、浸透の面において位置づけできる。また、各個人に対する刺激を第一としているために、市民ひとりひとりのbottom-upを刺激する切込み的な効果を持つ。

4.3 大阪上町台地での実践事例

「まち巡り」の視点を持つまち体験行動の事例について考察する。筆者の属する研究室が係わっている上町台地まち巡り型イベントについて見てみよう。対象地である上町台地は歴史の古い寺社町であり、かつ大阪で唯一の高台を形成しており、閑静な中に坂や緑がある景勝地であるが、近年の大阪の人々にはあまり知られていないという地区特性を持つ。この「ことおこし」は上町台地への関心を高めることを目的として、90年春¹¹⁾、同秋、91年春¹²⁾と3回連続して展開されている。それぞれの概要を表3(次頁)に示した。

この「ことおこし」は、それぞれについて中心的なテーマを設定し、そのテーマから対象である上町台地についてコンセプトを展開しているまち巡り型のひとつと言える。ひとつの意味像をそれぞれ描き、参加者に「太陽への巡礼者」、「緑を植える人」、「水屋」といった登場人物としての展開を持っている「演技演出型」と言えよう。

4.4 「まち巡り」の評価

このように「まち巡り」の視点を備えた、まち体験行動を行った結果、次のようなことが分かった。

1) 純化した意味像からの現実環境の評価

第1回目の「聖なる太陽」では、太陽の台地という意味像であり、参加者が最も評価した眺めは「四天王寺西門から眺めた夕陽」であった。これに対して第2回目「緑」では、「緑の多さ」であり、同じコースを歩いても評価する要素がテーマに沿って変わっている。逆に、テーマに合わないものは評価しないということから、参加者がテーマ

表4 上町台地まち巡りイベントにおける参加者の評価した場所(上位3地点)

からの視点をもって現実の環境を見直していることが分かる。ひとつの、まちとのつながりを構築

テーマ	聖なる太陽(90年春)	太陽+緑(90年秋)	水(91年春)
質問	「最も神聖な場所は?」	「最も神聖な場所は?」	「特に印象に残った場所は?」
上位3地点	①生国魂神社 17% ①家隆塚 17% ①四天王寺 17%	①生国魂神社 24% ①清光院(の滝) 24% ③四天王寺境内 12%	①清光院(玉出の滝) 27% ②二つ井戸 15% ③高津宮(梅の井) 13%

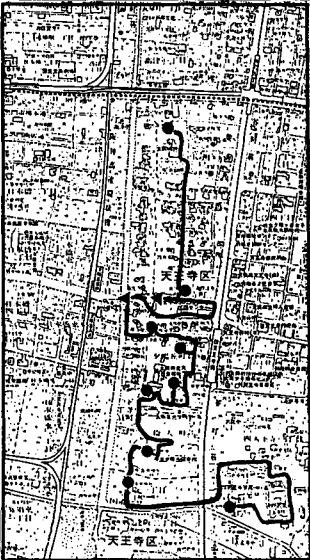
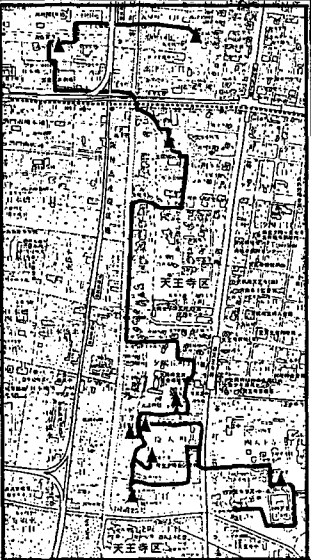
しつつある糸口ということができよう。ポイントのひとつである大阪で唯一の滝がある清光院が、表4のように評価を変えているのは設定したテーマの差によるものであろう。

また、歩いた道に名前をつけてもらおうと、「夕陽丘の巡礼古道」「寺町巡礼の道」「上町の昨日と明日の間をゆく道」(90年春)、「樹と坂のある道」「緑と憩のある道」(90年秋)とあるのは、意味像の再確認と参加の視点からの意味づけのひとつと呼べる。

2) 展開による意味像中の演技性の評価

歩いた印象を聞くと、「鈴」をつけて巡礼を演じたことで「心の洗濯」「心の安らぎ」「昔の生活」(90年春)また、竹筒に水を汲んで運んだことによって「自分で水を汲んだりして水屋の気分だ」「枯れた井戸に与えた水、この水との共存の大切さを体験した」(91年春)といったように、演技することで「まち」=台地に対する印象が深められていることがわかる。

表3 上町台地まち巡りイベントのあゆみ

名称	『九輪の台地』/春分の日	『九輪の台地』/秋分の日	上町台地水めぐり
日時	1990年 3月21日	1990年 9月23日	1991年 3月21日
参加人数	60人	220人	230人(抽選)
概要	大学の研究室が「環境資源の豊富な上町台地」に関心を集めようと企画・主催。「太陽」をテーマに設定し、「巡礼」としてのスタンプラリー形式で行なう。ほどよい人数で夕陽も見ることができ、聖なる台地として見直すことができた満足感の高いものであった。	大学の研究室と大阪市の職員ら有志が連続性を考えて個人で企画・主催。準備期間があまりなかったため、ポイントは「太陽」と同配置で、「緑」のポイントをかませず演出。予定百人のところ二倍を超える参加があり、配布物等の不足で不満が聞かれた。	大阪市の行事「環境再発見ウォーキング」となる。テーマの「水」自体が上町台地で乏しい資源であったため、仕掛けに工夫を凝らし、在りし日に想いをはせるようにした。前回の反省より申込抽選制にした結果、応募が千人近くあり、三百人に抽選した。
コースとポイント			
イベントの情景			
テーマ	聖なる太陽	太陽+緑	水(あなたは水屋です)
イベントの純化	上町台地がかつて夕陽を見る日想観の聖地であったことを意味像とする。ポイントは太陽がみることのできる眺望点を選別。	上町台地が大阪市の中でも、その斜面や寺社の境内に良好な緑を持っている面を意味像とする。緑を見ることのできるポイントを設置した。	上町台地という地形性から、かつては崖下に名水が湧いていた頃(天王寺七名水)を意味像とした。かつその名水跡や現在の井戸・滝をポイントとする。
イベントの展開	【太陽への巡礼者】……太陽への巡礼を演じてもらうために、鈴と集印帳を配布。また、太陽の光と対話するための手鏡を配布。	【緑を植える人】……緑を考えてもらうために、種を配布。それぞれの家庭で蒔いてもらうことにした。鈴、集印帳も連続的に配布。	【水屋】……水屋の道具として竹筒を配布。水を汲み、運び、洒れた井戸にかけ「水分(ミヅリ)の儀」。鈴、集印帳も配布。
影響・効果	「聖なる太陽」からの現実環境の評価ができた。かえて俗なる部分が目につく。夕陽丘というイメージの共有化があった。「心が洗われた」という声も聞かれる。	「緑」の大切さを認識。今後の行政の姿勢に対する意見も聞かれた。前回と比較して、テーマの設定によって評価する基準も変化することが分かった。	水屋の気分になって、水の大切さを認識。上町台地の寺社以外の面を見直し、その奥の深さに気づく。現実の資源が乏しくても、演出・仕掛けによって、テーマを伝達できることが分かった。

3) かかわり合いの「もちかえり」

テーマごとにまちとのかかわり合い(体験)を演出したために、「太陽はどこへ行ってしまったのか」(90年春)、「まちの中に緑が少ない。公園の中や空き地に花を植えましょう。」(90年秋)、「水の都と呼ばれるが、川は汚れ、水道水は臭うなど水について考えるべき。」(91年春)といった日常では見えにくくなっていることに気づくことができ、自らの生活を省みることにつながった。特に、連続的にコンセプトを変容して行った結果、それぞれのもちかえりが違うことは、コンセプトの純化と展開の有効性を示している。

5. まとめ

「まち巡り」の視点を持つ事例の考察も含めて、「ことおこし」の方向性についてまとめる。

① 視点付与 — 見えにくいまち(Invisible City)の解説 —

「まち巡り」は、イベント内で提示する意味を強く押し出し、その意味を読み解くものであり、参加者にとっては、その強い視点に立って日常では見えにくい素材に気づく効果を持つ。

② 意味(テーマ)の共有化 — 同じ視点からの評価 —

「ことおこし」としての舞台設定に俳優として参加者を導入するために、広く人々に訴えることが可能であり、ひとつの意味像を共有しやすい。その中で参加者が批評する視点を持ち、その意見を取り入れる柔軟なシステムがあれば、より全体性の高い意味像が形成され、まちづくりの将来像へのベクトルとなる。

③ 個人の意味づけへの刺激 — bottom-upへ —

参加者自身が意味像に組み込まれているために、部分としての個人と全体としてのまちとのつながりが捉え易い。このことは、「私のまちである」という個人のアイデンティティを形成することにつながる。

④ もちかえりの効果 — 環境学習へ —

演技という人と空間との関わりを演出する場合には、その効果のもちかえりとして、まちへの関わり方について刺激を受け、身近なまちにおいてもそのかかわりを用いてみようとする環境学習的な効果を見ることができる。

「ことおこし」が、以上のような有効性を備え持つことが分かった。今後の展開としては、環境観を育成し、そのいくらかを共有化した次の段階として、いかに市民の意味像を集積し、多くの感性を捉えて刺激させるかという仕掛けが愛着形成への重要な段階となるであろう。

参考・引用文献

- 1) 盛岡通; 地域環境計画における市民主体の環境づくりの支援システム, 土木計画学研究・講演集 No. 7, 1984, pp269-276
- 2) 新英和中辞典; 研究社, 1977(第4版)
- 3) 森田三郎; 祭りの文化人類学, 世界思想社, 1990, pp119-123
- 4) 橋本研一郎; 都市とイベント, (新都市1987-1), pp98-107
- 5) 筒井喜考; 集客考現学, (電通集客力研究会委: 集客力), pp181-198
- 6) 瀬尾文彰; 意味の環境論, 彰国社, 1991, p156
- 7) 瀬尾文彰; 前掲書, p154
- 8) 森戸哲; 地域にみる「イベント」の意味, (地域開発8308, 1983), pp10-15
- 9) 八尾哲史; 地図遊びとまち歩きを通したまち環境学習に関する研究, 大阪大学大学院1990年度修士論文
- 10) 倉原宗孝・延藤安弘・横山俊祐; まちかどオリエンテーリングの有効性に関する考察, 第23回日本都市計画学会研究論文集, 1988, pp163-168
- 11) 盛岡通・近藤隆二郎; まち巡りの体験誘発による環境づくり支援, 第3回環境システム研究, VOL18, 1990, PP38-43
- 12) 近藤隆二郎・盛岡通・城戸由能・原田弘之; 大阪上町台地における水文化の発掘とその現代的ことおこし, 土木史研究 No. 11, 1991, pp259-264